

Poly-Vitamina

身體補強・抗病力増大 病弱體を挽回する

瘦せた身體が肥る、栄養不良と衰弱に。ポリウイタミナー

錠剤 ポリウイタミナー

胃腸治療

胃腸は全身に栄養を送るダイナモであり、これに故障があればどんな滋養物、栄養物も効果はありません。虚弱者、病弱者の大部分は同時に胃腸機能の薄弱者であり、殊に肺結核病者の如き特に栄養充實を必要とするものに却つて食慾不進に陥れるものが多いのであります。これは醫學の統計の示す嚴然たる事實であります。

「錠剤ポリウイタミナー」は全身機能、殊に胃腸状態を活性化し消化液の分泌を旺ならしめ、食慾を増進せしめる活性酵素、ビタミン、複合糖質、三百倍チヤスタターゼ、ペブリン等を多量に含有した綜合錠剤です。虚弱者、病弱者及び胃腸障害者は錠剤ポリウイタミナーを常用しますと、胃腸は段々と強健となり、食慾は増進し、消化吸収は旺盛となり、日常食物中より栄養分を十分に吸収せしめると同時に、日常食物に不足勝ちの各種ビタミン、ホルモン並に蛋白質、脂肪、グリコーゲン等を豊富に供給します。

栄養増進

作業能率の倍加は先づ健康です。栄養の充實で、大なる力を發揮させるにはそのエネルギーの燃焼原として多量の栄養を必要とするのは當然ですが、その補給には食慾を旺んにし日常食物を充分に栄養化し、血液化することにあるは勿論です。毎日如何に多くの滋養分を攝つてもそれが充分に血や肉に同化されずたゞ胃腸を素通りするだけでは栄養が衰へ體力は低下して病氣を惹き起す原因ともなります。

錠剤ポリウイタミナーは日常食物の消化を助け、栄養を充實し、それに日常食物に不足勝ちのビタミン、チヤスタターゼ、ペブリン等の消化酵素を多量に含有してありますから完全なる栄養を体内に送り、その結果肺心臓、腎臓など体内諸器等の活動も旺んとなり病氣の治りはひとりでに早められるのであります。

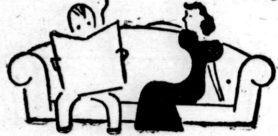
疲労解消

慣れない作業や忙しい仕事に従事すると体内に多量の疲労素が發生し、筋肉や神経に炎症を起して疲労を永びかせ、痛みや凝りを起すものです。この疲労素の解消にはビタミンB複合錠が必要ですが、それには是非ポリウイタミナーを常用してその不足を充分に補給することが肝要です。

朝から晩まで過度な労働を続ける人々には如何にして早く疲労を除いて明日に必要な活動力を養ふかでありませう。そのためには休息と栄養とが必要ですが、生活より推して休息よりも栄養といふことになりませう。筋力を保つに不可欠の栄養素、ビタミンB複合錠を活動の量に比例して充分に補給する事は最も合理的にして且仕事の能率を上げる事になります。

近代人の精神と肉體改善の推進力

ポリウイタミナーは栄養と治療の二重作用を充分に發揮します。即ち神経系統の働きを深め、疲労と無氣力にある病的體質を好轉して體力と力を充溢させ、栄養の増進、食慾増進、血液増殖等諸質を著しく改善して全身に發刺たる元氣を漲らせさせらるる活動に備へます。特に事業家、事務家、學者、著作家、學生、運動家等の如く精神的にも肉體的にも疲労し易き人



病衰弱が更生す

人にポリウイタミナーの價値は極めて大切で過勞による體質低下を防止する目的に成績良好です。

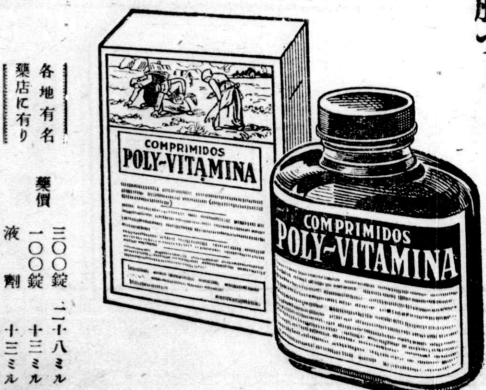
人々が健康を保持し、完全なる栄養を保つ爲にはビタミン剤の適確なる供給が絶対に必要です。虚弱の人、發育の悪いお子さん、産前産後の衰弱、乳汁不足の婦人、疲れ易い人、精力の減退等凡て栄養を必要とする人にポリウイタミナーを用ふれば漸次血を増し、栄養を豊かにし、全身細胞を強化して、發刺たる健康をもたらします。

肥れば病氣に勝つ!

昔から慢性胃腸病や結核性體質、神經衰弱は肥れば治るといはれて來ました。之らの病氣はすべて疲れ易い根氣のない、抵抗力の弱い體質の人々に根差して起るもので、慢性諸症の根本治療の急務は體質を強化改善し、堅肥りに肥つて來れば、理窟ぬきに不知不識の中に治療の目的を達し抵抗力は充實して來ることに氣付かれます。

人體の全身機能に活力を與へ、精力を増進さす

ポリウイタミナー



ポリウイタミナーは最も新しい微生物ヘーフエ菌、濃厚強力なるビタミン複合錠、最高液チヤスタターゼ及びペブリン等數種の綜合錠剤にして、體力、抵抗力を強め、直接病原に作用して、病原治療を營み、栄養を充實し、胃腸の組織を強化して、食慾を増進さし、消化吸収を旺んにして便通を整へる等々廣汎なる作用を働く。

製造及發賣元 大河内藥化學研究所
Rua Santo Amaro, 706 - Caixa Postal, 1082
Telephone, 2-4818 - Sao Paulo

各地有名藥價 三〇〇錠 二十八ミル
一〇〇錠 十三ミル
液 劑 十三ミル

経済と産業

時局下に戸惑ふ 日伯貿易を觀る

ブラジルに有利な片貿易

一九三三年以来日伯貿易額が上昇の一途を辿つてゐることは、統計上も事實でも明らかである。一九三三年の貿易額は、前年比で約二〇パーセント増加した。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。一九三三年のブラジルの輸入品は、前年比で約二〇パーセント増加した。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。

最大の輸入品であるが、それ以外の輸入品も増加している。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。一九三三年のブラジルの輸入品は、前年比で約二〇パーセント増加した。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。

一九三三年のブラジルの輸入品は、前年比で約二〇パーセント増加した。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。一九三三年のブラジルの輸入品は、前年比で約二〇パーセント増加した。これは、日伯貿易の好転を示している。特に、日伯貿易の好転は、ブラジルの輸入品に有利な片貿易によるものである。

噸數では殖えたが 噸數では減少

昨年十二月のサンクトス入港船噸數は、前年同月比で減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。

昨年十二月のサンクトス入港船噸數は、前年同月比で減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。

昨年十二月のサンクトス入港船噸數は、前年同月比で減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。しかし、噸數では殖えたが、噸數では減少した。これは、海上不安定によるものである。

年々増産の一途 アマゾンのジュタ

大部分は邦人が生産

アマゾンのジュタ生産は、年々増産の一途を辿つてゐる。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。

アマゾンのジュタ生産は、年々増産の一途を辿つてゐる。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。これは、邦人の生産によるものである。大部分は邦人が生産している。

棉花週報

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。

サンパウロ市場 棉花週報。棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。これは、棉花の相場は、前週比で上昇した。



棉の虫害豫防と 驅除法について

棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。

棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。これは、棉の虫害は、豫防と驅除が重要である。

増大する鐵鋼消費

三割五分を國産で賄ふ

鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。

鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。これは、鐵鋼消費は、年々増大の一途を辿つてゐる。

産業組合進軍譜

昨年中の新設七九四

産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。

産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。これは、産業組合は、昨年中に七九四の新設があった。

YAMASHITA LINE
山下汽船株式會社
定期往航 極東—紐西—南米 定期復航 南米—羅府—極東
太平洋洋、フィリピン、荷物輸送引受申候
使用船隻萬噸型新造優秀貨物船

山月丸 山風丸 山霧丸
山彦丸 山浦丸

詳細は下記支店代理店に御問合被下候
貨物船に付き旅客運送は午勝手御断申上候

サンクトス市 JOHNSON LINE AGENCIES
Praça da Republica, 22 Phones. 4694 e 5107 = Santos
市 L. FIGUEIREDO & CIA.
Rua Libero Badaró, 92 = Phone 3-232 = São Paulo

Casa Regina Ltda.
R. S. Bento, 28 - Fone 3-1567
São Paulo

カミーザ
ネクタイ
靴
其他紳士向用品

全品特價提供、是非御来店を

ジョゼ・ボニファシオ街の近く
サン・ペント通りです。

J. MICHELETTI
AO REI DAS BALANÇAS
Rua Brigadeiro Tobias, 400 - Telephone 4-3424
Fabrica
Rua Mendes Junior, 401 - Brax
São Paulo

各種小型から車、家用用の大型
各種計量器もあつます
日本人會社、大商社に御取引を
頂いて居ます、御買入用の計量器
御買入の計量器に御買入の計量器
に御買入の計量器に御買入の計量器

専門店

海興銀行
CASA BANCARIA IMIGRATORIA LTDA.
São Paulo - Registro - Pedro de Toledo
Lins - Londrina

あまのこ
菊池章子
あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や

あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や

あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や
あまのこは、今や

目下賣出中!
一九四一年勢頭を飾る
コロムビア邦楽盤
正月新譜豪華陣

目下賣出中!
一九四一年勢頭を飾る
コロムビア邦楽盤
正月新譜豪華陣

目下賣出中!
一九四一年勢頭を飾る
コロムビア邦楽盤
正月新譜豪華陣

男は泣かぬ
大津繪
淡海節

男は泣かぬ
大津繪
淡海節

男は泣かぬ
大津繪
淡海節



日本人

発明物語



そのと氏宮二機行機

飛行機の發明... 今から四十三年前、フランス...

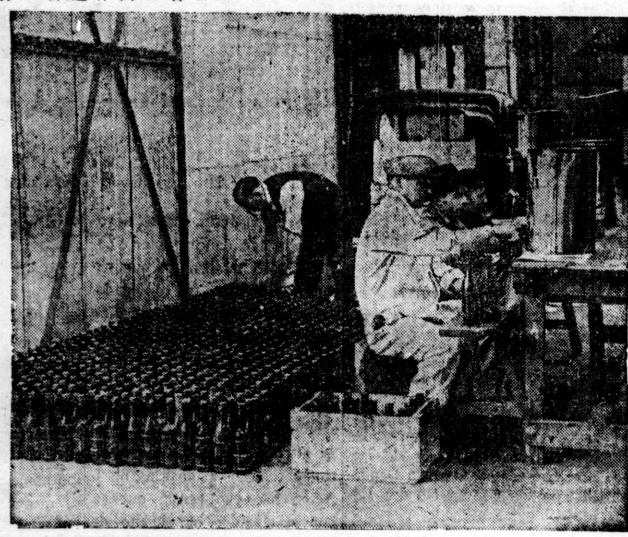
どんな偉勳を立てたか 譽れの國葬十二人



松方公、西園寺公... 國葬のうちに故國寺を...

ルテクカ・フトロモ

造製に治退クンタもで國英



モロトフ・カ... 前も酒落た名... 今、今、今...

ことになつてゐます... これ、西洋人が勝手に...

大久保利通... 大久保は、西園寺と力を...

文藝評論... 「パール・バック女史の...

新體制とは何か? ... そしてなぜ必要なのか?

東郷平八郎... 西園寺公使...

動物の話... 「丸」がつくわけ...

超日月光... 子供を甘やかす親は無敵...

モテ吟行... 若波菊治...

前朝の朝... 中井はじめ...

Supplemento Economico

Columna dos nisei

GALERIA DOS NISEI

Matchan

II

Foi numa festa. Esse negocio de cantar, dançar, pular e comer. Não sei bem porque me convidaram, mas fui convidado. Eu estava num canto olhando muito socegado. E' gostoso ver os outros. A gente vê cada coisa! Mas isso fica para outra vez. E foi chegando gente. Encheram a casa. Depois eu presetei atenção. Quasi tudo nisei. Então comecei a olhar as nisei. Agora não vou pensar que eu sou galanteador ou sujeito de más intenções. Nada disso. Eu olho porque gosto de olhar. E depois valia a pena. A gente não acredita mas ha uma porção de nisei bonitas. Bonitas a valer. Depois olhei para os nisei. Cada sujeito feio! Eu conhecia a maioria. Pelo menos podia chegar perto e dizer: Como vai? — e receber um: Vou indo bem. Enquanto estava olhando, me lembrei: e agora de quem será a vez? Das bonitas ou das feias? Nesse negocio não é bom tocar. E' pior que casa de marimbondo. E depois eu não tenho nada com as bellezas dos outros. Isso é lá com os noivos e os namorados. O que elles acham bonito, é; o que elles acham feio, é. Os outros não podem achar nada porque senão apanham. E' por isso que eu não acho nada. Eu não entendo nem um tostão disso. Depois não vão dizer que eu disse que essa é bonita, que aquella é feia.

Eu estava olhando da escada. Eu sou baixo e se não subo não enxergo. No meio daquela porção de cabeças se mexendo, eu vi uma que pairava acima das outras. Não era bem nas nuvens porque havia o tecto e o tecto é duro e a cabeça não é broca. Olhei bem: era a Tsuya. Depois me lembrei. E' a nisei mais alta da colonia. Não é bem um poste. Isso seria falar mal della. Depois poste não é gente. Nem querendo fazer poesia. E' quando muito um lugar de encosto. Agora imaginem a gente se encostar na Tsuya. Levava um bom tafele. Pudera! Também que confiança! Também não é girafa. Girafa tem o pescoço comprido e corpo mosqueado. A Tsuya não tem o pescoço comprido nem o corpo mosqueado. Ella é só alta. Só isso. Depois é morena. Morena? Japoneza morena? Vá mentir na cadeia. E' morena, sim senhor. Esse negocio de chamar japonez com cor de caixa de lapis-de-côr Faber que é mentira. Esse moreno não tem nada com o preto. E' o tal do: E' loura ou morena? E' esse moreno. Eu não sei que cor é. Não entendo disso. Mas ella é só alta e morena? Não. Tem uma porção de cousas mais. Mas será que interessa? Eu acho que não. Depois vão dizer que eu sou maledicente. Isso não fica bem para um sujeito como eu, muito sizado, de muito respeito e além disso muito bom. E' preciso manter a reputação. Nada como um nome honrado, como

dizia meu avô que não conheci e que não me conheceu. Eu acho que todo mundo conhece a Tosca. Não é a Tosca do Puccini. A Tosca de que estou falando não tem nada com os italianos e muito menos com a Opera. E' uma Tosca japoneza. A origem é simples. Foi o resultado da supressão de um shi e que na grammatica tem um nome complicado. Mas com isso ficou Tosco. Ora, Tosco como nome de gente não é lá coisa razoavel. Tosco dá ideia de imperfeito. Agora considerando que o homem é o ser mais perfeito da criação, isso não ficava bem. Então fizeram de Tosco, Tosca que é nome de gente e de mulher. E' essa a razão porque uma digna filha da terra das ce-rejeiras ficou com um nome de uma digna filha da terra dos macarrões. Mas o nome está bem porque a Tosca fala cantando. Cantando e saltitando. Quando a gente ouve a Tosca falar tem a sensação de pulinhos. E' uma cousa syncopada, cheia de arranjinhos. Agora vocês imaginem isso com uma velocidade de matracca em sabado de alleluia. E' a Tosca falando. Quando a gente começa a ouvir o começo ella acabou de falar. Depois ella não toma folego para falar. Dá até aflicção. Isso tudo e mais uma porção de gestos dão uma imagem muito sonora da Tosca. Dizem que quando ella começou a trabalhar no Kaiko aquillo ficou feito mercado. Depois não sei o que aconteceu, aquillo ficou feito cemiterio. A Tosca viu macambuzia, moderada de gestos medidos. Quasi não falava, coitada. Como ella deve ter soffrido. Coitada della. Depois disso houve o campeonato de tennis da Liga. Ella foi a campeã dos pernetas. O Udihwa fez sugera, brigou, quasi chorou mas quem ganhou foi ella. Com isso ella voltou a ser a mesma. Agora em todo lugar em que ella vai, quando fala, parece buscapé, que é ligeiro e não tem direcção nem sentido.

Quem agora vê a Clara até fica assustado. Antes ella sapateava. Não é esse negocio de bater o pé no chão e berrar: eu quero, eu quero, eu quero! E' aquella cousa que os americanos fazem: botam uns ferros na sola do sapato, tocam uma musica e começam a pular, fazendo um tá-tá-tá, tá-tá-tá. Ella tambem cantava. Fox. As vezes ella botava um kimono ia para exposições, dançava a dança do leque. E' uma cousa mais ou menos assim: juntavam uma porção de moças, vestidas de kimono e com leques, e ficavam levantando e abaixando o braço, com o leque na mão. E' muito bonito, quando a gente não vê. Porque quando a gente vê, fica com vontade de jogar pedra e isso não se pode fazer. Agora isso ella era louca por dança. Coitado do irmão della. Depois não sei o que aconteceu. Agora ella fica num canto, quieta, olhando, a gente não sabe o que. Quando a gente fala em Santos ella accorda, e reanima e começa a perguntar: Santos? Santos? Será que ella gosta assim do mar? O mar é bonito, não ha duvida, mas ficar com cara de desanimada, só por causa do mar, vocês não acham que é demais?

Os paizes representados na "Junta" terão direito do voto em relação ás quotas que lhes são determinadas pela forma seguinte: Brasil, 1; Colombia, 3; Costa Rica, 1; Cuba, 1; Equador, 1; El Salvador, 1; Estados Unidos, 12; Guatemala, 1; Haiti, 1; Honduras, 1; Mexico, 1; Nicaragua, 1; Perú, 1; Republica Dominicana, 1; Venezuela, 1. Total, 36.

De como a imprensa brasileira compreendeu a riqueza de news, de sensacionalismo mesmo, existente num recenseamento, diz, melhor do que qualquer outra coisa, esta estatística curiosa: conforme recortes chegados á Divisão de Publicidade do S. N. R., jornaes de todo o paiz fizeram, de janeiro até 1.º de setembro, dia do Censo, 37.724 publicações e, daquella data até o ultimo dia do anno findo, 17.886 publicações, ou sejam 55.610 em 1940.

E a promessa de factos curiosos, emocionantes, de noticiario cheio de conteúdo dramático, foi e está sendo cumprida, de modo que hoje podemos bem compreender porque nos Estados Unidos, onde os censos estão dentro da rotina administrativa, realizados decenalmente desde ha um seculo e meio, os grandes jornaes concedem ainda e sempre tanto destaque ao noticiario desses recenseamentos.

Sr. Presidente da Republica aprovou o convenio inter-americano do café

Decreto-lei assignado pelo Chefe da Nação

O sr. Presidente da Republica, aprovando o convenio inter-americano do Café, assignou o seguinte decreto-lei:

Art. 1.º — Fica aprovado o diploma das resoluções adoptadas pelo Convenio Inter-Americano do Café, assignado em Washington, Capital da Republica dos Estados Unidos da America do Norte, aos 28 dias do mez de novembro de 1940, pelos representantes dos governos do Brasil, Colombia, Costa Rica, Cuba, Salvador, Equador, Estados Unidos da America do Norte, Guatemala, Haiti, Honduras, Mexico, Nicaragua, Perú, Republica Dominicana e Venezuela, cujo texto integral em portuguez a este acompanha.

Art. 2.º — O Departamento Nacional de Café, fica autorizado a expedir as resoluções necessarias para o cumprimento de todas as clausulas e estipulações do convenio ora aprovado;

Art. 3.º — Este decreto-lei entrará em vigor na data de sua publicação revogadas as disposições em contrario.

QUOTAS E EXPORTAÇÃO PARA OS ESTADOS UNIDOS

O convenio agora aprovado, estabelece no seu artigo 1.º:

"No intuito de distribuir equitativamente o mercado do café com os Estados Unidos da America, entre os diferentes paizes produtores de café, ficam estabelecidas as seguintes quotas como quotas basicas anuais de exportação para os Estados Unidos da America, de café procedente de outros paizes participantes deste convenio:

Paiz	Quota
Rep. Dominicana	120.000
Venezuela	420.000
Total	15.545.000

Paiz	Quota
Brasil	7.813.000
Colombia	1.079.000
Costa Rica	242.000
Cuba	62.000
Equador	89.000
El Salvador	527.000
Guatemala	312.000
Haiti	327.000
Honduras	21.000
Mexico	239.000
Nicaragua	114.000
Perú	43.000
Rep. Dominicana	138.000
Venezuela	606.000
Total	11.612.000

variavelmente se apaixonou pelos acontecimentos extraordinarios, que interrompem a monotonia da vida quotidiana; factos naturais, como as inundações, as erupções vulcanicas, os tremores de terra, para não falar nos cometas, — factos humanos, como os assassinatos mysteriosos — factos miraculosos, etc."

De como a imprensa brasileira compreendeu a riqueza de news, de sensacionalismo mesmo, existente num recenseamento, diz, melhor do que qualquer outra coisa, esta estatística curiosa: conforme recortes chegados á Divisão de Publicidade do S. N. R., jornaes de todo o paiz fizeram, de janeiro até 1.º de setembro, dia do Censo, 37.724 publicações e, daquella data até o ultimo dia do anno findo, 17.886 publicações, ou sejam 55.610 em 1940.

Noticiario rico de interesse

No inicio da publicidade que desencadeou em abril do anno findo e com a qual conseguiu identificar inteiramente o publico com a operação censitaria de setembro ultimo, a Divisão de Publicidade do Serviço Nacional de Recenseamento chamava a atenção para o que havia de jornalisticamente exploravel na realização do grande balanço estatístico do paiz.

Recordava, a proposito, a observação de Georges Weill, autor do mais exhaustivo estudo até hoje realizado sobre a imprensa: "O grande publico in-

As relações economicas nipo-brasileiras

De um modo geral o intercambio commercial entre o Brasil e o Japão, vem se desenvolvendo intensamente, de 1933 para cá. Até então o movimento de trocas entre os dois paizes se mantinha mais ou menos estacionario, ora aumentando, ora diminuindo o volume de trocas, sem indícios de negociações com novos productos. A partir de 1933, começou o algodão em rama a ocupar lugar preponderante nas nossas exportações para o Imperio Nipponico que subiram a um total de 2.122.106 libras-ouro em 1937, descendo em 1938 para 1.650.601. Já no anno passado alcançaram 2.020.583 libras-ouro.

Comparamos agora o valor geral das exportações com o das remessas do algodão em rama. Para o total geral das exportações destinadas ao Japão em 1937, que foi, em moeda nacional de 240.335.832\$000, contribuiu aquelle producto com 222.716.252\$000, ou seja 93%; para a somma global referente a 1938 igual a réis 233.922.100\$000, com 214.812.171\$000, ou 92%; e no anno passado, para 306.096.288\$000, com 278.268.751\$000, ou ainda 91%. Vê-se, portanto, que as exportações brasileiras para o Japão são constituídas quase que unicamente pelo producto que justamente atravessa agora grave crise. Realmente o paiz nipponico figurava entre as maiores compradoras das nossas safras algodoeiras, ao lado da Alemanha. E continua a manter a posição de forte importador de algodão brasileiro, ainda que tenha diminuído este anno o volume das suas aquisições.

Quanto aos outros productos, processou-se ligeiro acrescimo nas remessas de couro e peles de 1938 para 1939 (799.771\$000 em 1938, contra 1.752.555\$000 em 1939), o mesmo acontecendo com as ceras, as madeiras, sementes, bagas, fructas e semelhantes, pedras e terras, minereos, minerais preciosos e semi-preciosos e outros.

O café brasileiro é cada vez menos consumido nos mercados japonezes. As quantidades importadas caíram de 3.663.420 kilos, em 1937, para 2.013.780 em 1938, não ultrapassando 771.000 kilos no anno findo. Em compensação exportamos no anno passado, 2.368.681\$000 de cereaes, contra nenhuma exportação desse genero nos annos de 1937 e 1938. Pelas tabellae publicadas nas paginas seguintes,

que vai de 1930 a 1934. Na classe das materias primas, os aumentos foram de 174 % no volume e 329 % no valor. Também a exportação de manufacturas, cresceu de 42 % na quantidade e de 210 % no valor.

Augmento na matança de bovinos em 1940

Segundo dados divulgados pelo Syndicato dos Invernistas e Criadores de Gado, de S. Paulo, verificou-se apreciavel augmento na matança de bovinos, de 1939 até hoje. Aliás 1940 foi o anno de maior matança, incluindo-se 1937, 1938 e 1939. Em 1937, a matança de bovinos attingiu a 266.711 cabeças, em 1939, a 239.711 cabeças e 272.391 cabeças em 1940 ou sejam 32.680 cabeças mais do que em 1939.

A guerra teve influencia favoravel

O embarque do gado por estrada de ferro foi menor em 1940 do que em 1939. Enquanto em 1940 o embarque foi de 224.262 cabeças, em 1939 foi de 307.339. Das causas dessa diminuição de em-

O Japão é o primeiro importador do algodão brasileiro

Telegramma do sr. Garibaldi Dantas ao ministro Salgado Filho

Ao ministro Salgado Filho, que chefiou a Missão Economica Brasileira, que visitou o Japão em 1936, o dr. José Garibaldi Dantas, chefe do Serviço de Economia Rural, enviou o seguinte telegramma: "São Paulo — Tenho a honra de comunicar-vos na qualidade de chefe da Missão Economica Brasileira que visitou o Japão em 1936, que a exportação de algodão pelo porto de Santos, em 1940, para aquelle destino, attingiu a 376.593 fardos, pesando 679.866.372 kilos brutos, maior que em 1939, quando alcançou 67.840.000 kilos. Collocouse, dessa maneira, o Japão, novamente em primeiro lugar entre os compradores de algodão do sul do Brasil. Juntandose ao embarque para o Japão os destinados ás fabricas nipponicas localizadas em portos chineses, o movimento de 1940 attingiu a 111.122.917 kilos, contra 110.459.513 em 1939.

Tomei a liberdade de comunicar-vos estes factos porquanto o exito dessa exportação tão importante para a economia algodoeira nacional dependeu de vossa proficua acção naquella Missão. Saudações. — (a.) JOSÉ GARBALDI DANTAS, Chefe do Serviço de Economia Rural".

A JUTA AMAZONENSE

No valor de 414.117\$100 foram exportados 112.316 kilos de juta, em um trimestre

A Companhia Industrial Amazonense S/A., com sede em Parintins, exportou, no trimestre de Julho a Setembro do anno passado, 112.316 kilos de juta no valor de 414.117\$100.

O Estado de Pernambuco, foi o maior comprador daquele producto, com 43.890 kilos, no total de 171.024\$700; o Rio de Janeiro (Districto Federal) vem logo a seguir, comprando 36.639 kilos, avaliado em 150.116\$200 e o Estado do Pará com 28.797 kilos, na importancia de 94.976\$700.

A juta de accordo com sua qualidade foi classificada pela Companhia Amazonense em, A, B, C, D e E.

Em 1937, a produção de fibras attingiu a 12 toneladas. Dez toneladas foram vendidas em Belém do Pará e 2, distribuídas em amostras para o Japão e outras partes do globo. No anno de 1938 a produção subiu a 60 toneladas, quasi triplicando em 1939, com 171 toneladas.

O cultivo da juta no Amazonas promete muito, como podemos ver, graças ao esforço e persistencia dos colonos japonezes, que após pacientes pesquisas, conseguiram adaptar de um modo perfeito, ás terras amazonicas, essa planta de origem asiatica. Em homenagem a seu cultivador, deu-se a variedade obtida no Brasil, o nome de Oyama.

Situação financeira e economica do Brasil

Na conferencia que realizou no Palacio Tiradentes a 29 do mez p. p., o sr. Artur de Souza Costa, ministro da Fazenda, referindo-se ao commercio exterior do Brasil, afirmou: que a evolução do commercio exportador do Brasil, no decennio de 1930 a 1939, se caracterizou por uma tendencia ascensional de conjuncto, até que a guerra, privando-o de mercados substanciaes, veiu contrariar-o. Saberemos resistir a essas influencias, como atravessamos o periodo agudo